

'18

前期日程

社会小論文

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は1冊(4頁)、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

1 次の文章を読んで、以下の間に答えなさい。

容易に予想されることであるが、一極集中のおもなプレイヤーは若者である。高度経済成長以降の共通する動きとして、20代前半までの若い世代は大量に東京圏に転入している。しかし、20代も後半になり始めると、その人びとは地方に戻る傾向があり、20代後半や30代前半では転出超過となっていた。

ところが、国土交通省国土計画局が明らかにしたところでは、このような傾向は2005年国勢調査結果では様変わりをしている。2000～05年には、今までとは異なり20代後半や30代前半でも、わずかではあるが転入超過に転化している。つまり、進学や就職で東京圏に出てきた若者が、30歳を過ぎても地方部に戻らない傾向が生まれている。

出典：小田切徳美編著『農山村再生の実践』農山漁村文化協会，2011年

(出題の都合上、一部表記・表現を改めた。)

問1 図は、東京圏(東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県)への転入者と東京圏からの転出者の総数の推移を示したものである。1955年～1970年と1985年～1995年における人口移動の特徴を読み取り，社会的背景をふまえてまとめなさい。(400字程度)

問2 2007年前後のピークでは，地方出身者が地方に戻らない東京圏への「滞留」が転入超過の原因となっている。これに伴ってどのような問題が生じているのか，あなたの考えを述べなさい。(200字程度)

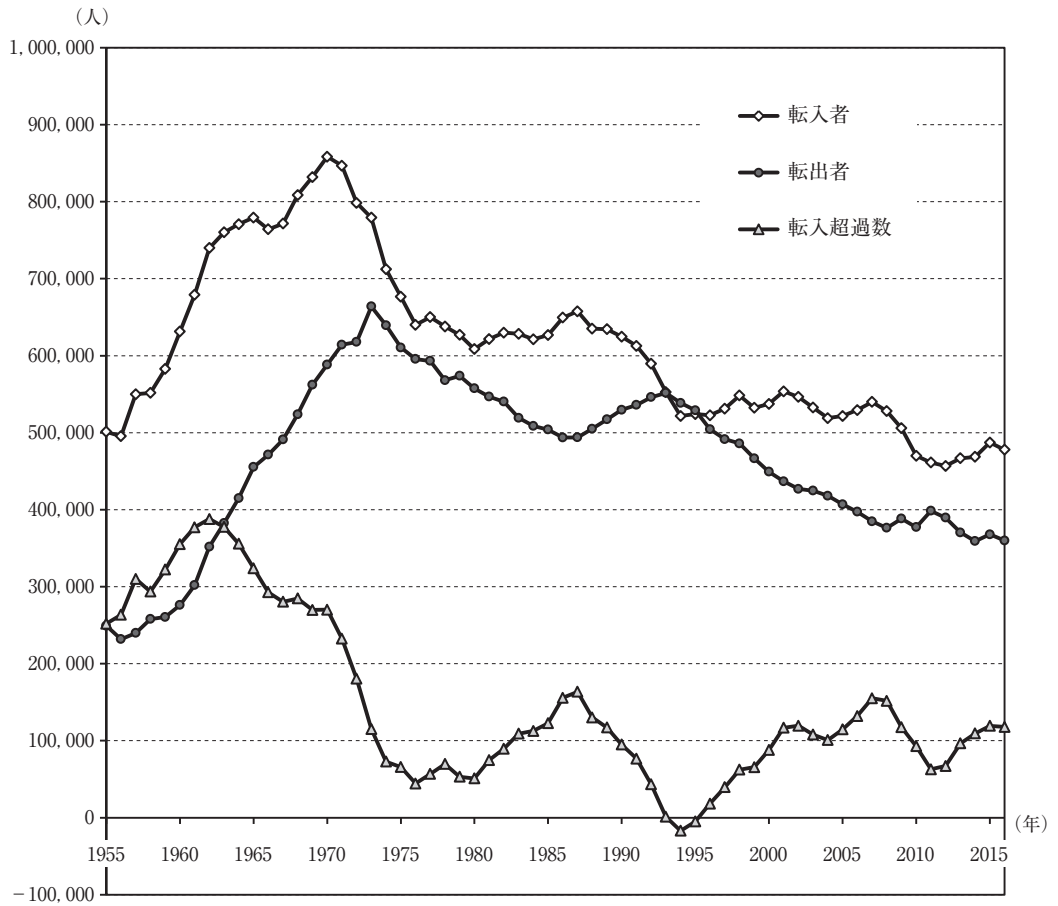


図 東京圏における転入者数と転出者数の推移
 総務省「住民基本台帳人口移動報告」より作成

2 次の文章を読んで、以下の間に答えなさい。

東京大学の社会科学研究所が2005年に実施した調査を見ると、20代から40代の男女が、小六の時に「希望していた仕事」に就いている人の割合は、8.2%である。中三の時に「希望していた仕事」となると、15.1%となる。

注目したいのは、この調査で尋ねたもう一つの質問である。「仕事にやりがいを感じたことがある」かどうかとの問いに対して、回答者の84.2%が「はい」と答えている。

当然のことであるが、「希望していた仕事」に就いた人(つまりは、夢を実現した人)だけが「はい」と答えたのでは、84%には遠く及ばない。ということは、「希望していた仕事」に就けなかった人も、多くはこの質問に肯定的に答えているのである。

この結果を、どう考えたらよいだろうか。——要するに、「希望していた仕事」や「夢だった職業」に就けたわけではない人でも、その多くは、仕事にやりがいを感じている。だったら、「夢の職業」に就けるかどうかなんて、あまり気にしなくてもいいのだろうか？

身も蓋もない言い方になってしまうが、仕事などというものは、案外、そんなものなのではないのか。

はじめは「つまらない」「やりたくない」などと思っていた仕事でも、仕事のやり方を覚え、やり続けていると、そして、自分なりに工夫を凝らして取り組むようになったりすると、俄然、その仕事が面白くなってくることがある。しまいには、その仕事に「やりがい」を感じるようになる。あたかも、最初からやりたかった仕事であるかのようにも思えてくる。そんなものかもしれない。

ただ、そうだとしたら、職業や仕事にかかわる「夢」や「希望」というものは、一度抱いたら、ずっと変わらないものなどではなくて、むしろ十分に变化しうるものということになる。実際に仕事をやりながら、変わっていくということである。大人はその事実を、きちんと若者に伝えているだろうか。

『希望のつくり方』(岩波新書、2010年)の中で、著者の玄田有史さんが強調していることがある。——希望は、実のところ実現しないことの方が多い。では、

希望がかなわなかった時に、どうするか。本当は、かなわなかった時にどう考え、どう行動するかが、決定的に重要なのである。人は、失敗や挫折を踏まえて、次の目標を設定し、そこに向かって努力することができる。そうしたことの繰り返しの後に、ついには希望がかなうこともある。この意味で、希望は「変わる」、そして、「変える」こともできるのだ、と。

希望は「変わる」、 「変える」こともできるとは、なかなか味わい深い表現である。「変わる」のは、運や偶然のチャンスに恵まれることもあるだろう。「変える」のは、本人の発想の切り替えや、意識的な行動や努力の結果である。

そして、同じことは、当然「夢」についても言えるだろう。夢は、偶然のチャンスに恵まれて「変わる」こともあるし、小さい時の夢であれば、いつのまにか変わっていたということもあろう。また、夢が実現できないとわかった時に、意識的に発想を切り替えて、別の夢を抱く、つまり「変える」こともできよう。

重要なのは、「夢」は固定的なものではなく、育ったり、育てたりできるものだという点にこそある。

出典：児美川孝一郎『夢があふれる社会に希望はあるか』ベストセラーズ、2016年
(出題の都合上、文章の主旨を変更しない範囲で、一部表記・表現を改めた。)

問 1 下線部について、筆者がそのように結論づけている理由を説明しなさい。
(200字程度)

問 2 子どもが「夢の職業」を思い描き、それを目指すことに、どのような意義と限界があるだろうか。本文を踏まえて、あなたの考えを述べなさい。(400字程度)

